國學院大學學術情報リポジトリ

〔書評〕 谷口雅博著 『風土記説話の表現世界』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 橋本, 雅之, Hashimoto, Masayuki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000453

〔書評〕

谷口雅博著

『風土記説話の表現世界』

橋本雅之

本書は、これまで谷口雅博氏が発表されてきた古風土記関係の論考をまとめて一書としたものである。目次によって本書の構成を示せば次のようになる。

- 序章 風土記の成立と性質
- 第一部 風土記の異伝
 - 第一章 『常陸国風土記』 国号起源説話考
 - 第二章 『播磨国風土記』 「二云」「一家云」の用法
 - 第三章 『肥前国風土記』 佐嘉郡郡名起源説話の特質
- 第二部 風土記の作品世界
 - 第四章 『常陸国風土記』 「風俗諺」の記載意義

- 第五章 『常陸国風土記』 倭武天皇の時代認識
- 第六章 『常陸国風土記』 多珂郡「サチ争い」説話の意義
- 第七章 『出雲国風土記』 「古老伝云」の内と外
- 第八章 『出雲国風土記』 郡郷名の表記意義
- 第九章 『出雲国風土記』 地名起源記事の文体
- 第三部 風土記神話の文学性
 - 第十章 風土記の異類婚
 - 第十一章 『常陸国風土記』 香島郡「事向」の文脈
 - 第十二章 『出雲国風土記』 の「御祖命」
 - 第十三章 『播磨国風土記』 の天日槍命と葦原志許乎命
 - 第十四章 『肥前国風土記』 弟日姫子説話考
- 終章 風土記の装いと記事配列意識

以上、序章、終章に加えて三部十四章からなる大著である。谷口氏の堅実な研究については今さら言うまでもないが、本書においても用例の丁寧な分析とそれに基づく慎重な判断という姿勢は一貫している。以下、本書の論考の紹介と私なりに感じたことをいささか述べてみたいと思う。

さて、本書における谷口氏の基本的な方法は、和銅六年の官命に基づいて編纂された古風土記の神話・伝説を、その編纂の意

図に即して解釈するところにあると言える。まず、第一部「風土記の異伝」は、「或曰」「一云」「一家云」などの形で記された異伝が、それぞれの風土記の中でどのような役割を果たしているのかを論じたものである。谷口氏は、『常陸国風土記』の国号起源説話にみられる倭武天皇の異伝について、これは主伝承を補足的するような付属的記事ではなく、

むしろ二つの記事が存在することで記事が完結するという
ありかたなのではなからうか（二八頁）

と指摘する。谷口氏は慎重に断定を避けておられるが、ここで挙げられている異族記事のあり方と合わせて考えたとき、谷口氏の解釈は妥当である。そしてこのような異伝の捉え方は、『播磨国風土記』の「一云」「一家云」の用法分析においても明確に示されている。この風土記における異伝記載の意味については、これまでも論じられてきており、たとえば山田直巳は、異説を記すことで地名起源譚は絶対性を喪失し、神話は歴史によつて乗り越えられる、という点に異伝記載の意義を認め^注た。これに対して谷口氏は、編纂という視点から見直し、

前半に（設定として）より古い時代の話を載せ、後半に新しい時代の話を載せる。前半の話と実際に現在存在する地名との中間に「一云」の話は位置しているのであり、（中略）それは、より古い時代の話を根本に据えるという考え方があって、決して「神話の否定」というようなものとは受け取れない（四九頁）

と述べているが、これは重要な指摘であると言わねばならない。なぜなら、古風土記の地名起源説話を対象とした研究の多くが、「中央」対「地方」という対立的な図式に拘泥するあまり、結果として地名起源説話の解釈がステレオタイプに陥っている中で、谷口氏の論は、その限界を乗り越えているからである。ここには編纂の視点がいかに大切なものであるかがよく示されていると言っていいたいだろう。このような谷口氏の考え方がもっともよく表れているのは、第三章「肥前国風土記」佐嘉郡郡名起源説話の特色の「おわりに」における次のような結びの一節である。

佐嘉郡郡名由来記事について言えば、在地の視点と中央の視点の対立ということではなく、その両者を記すことで、

「佐嘉」という音と表記の背後に含まれた意義を重層的に示そうとする意図によるものであったと結論づけるものがある。(七七頁)

近年、古風土記の研究を志す若い人が増えてきたが、ぜひとも谷口氏のこの堅実な研究方法と、テキストに向き合う態度を学んでほしいと思う。本書は、これから古風土記を研究しようとする者にとっての良き教科書であると言っても決して過言ではない。

続く第二部「風土記の作品世界」の、第四章『常陸国風土記』「風俗諺」の記載意義・第五章『常陸国風土記』倭武天皇の時代認識¹では、『常陸国風土記』における歴史と時間認識の問題が取り扱われている。古風土記の歴史と時間の問題を考えると、そこには大きな問題が横たわっている。ここで詳しく述べるゆとりはないが、ポイントとなるのは、一つは時間認識を示す「昔」「古」「今」が、それぞれの伝承の中でどのような意味を持っているのかという問題であり、もう一つは伝承者・古老・編者の関係をどう捉えるのかという問題である。これをもう少し一般化して言うならば、地誌において歴史と時間はど

のような方法で記述されているのかという問題に発展している。これは古風土記の本質にかかわる問題として重要であると言わねばならない。このような問題があることを念頭に置いて、第四章・第五章を読んだとき、たとえば、枕詞的表現を含む地名について、編者がそれを「風俗」の言い伝えとして地名起源伝承と並記して「重層表現」を取ることで、

ひとつの地名にまつわる伝承を完結させるという方法をとっているのである(第四章、一〇三頁)

と述べられるとき、ここでは地誌の「編者」の役割の中に、説話の「伝承者」の役割が重ねられているような印象を持つ。また、第五章において、倭武天皇に関して、

倭武天皇は、「倭武」という名を背負い、地名の起源に関わっていくことでヤマト王権の浸透を果たしていく。そのように描くのが『常陸国風土記』の編述方針であり、筆録方法であったと考えられる(一一二頁)

と述べているが、ここでも、編者の役割、言い換えれば地誌に

おける歴史記述の意義は何かという問題が浮かび上がってくるように思った。この二つの論考を読んで、歴史と時間がどのように認識されていたか、それを取り扱う編者の役割は何であったのかという問題が古風土記研究の重要な課題であるとあらためて感じたのである。

さて、続く第六章の「常陸国風土記」多珂郡「サチ争い」説話の意義は、編纂論のみならず地名起源説話研究の立場からみてもきわめて意義深い論考である。これまで、この「サチ争い」説話についてはあまり関心が払われておらず、したがってその重要性についても認識されてこなかった。これについて谷口氏は、

何故天皇と皇后はサチ争いをしたのか（サチ争いを記すことの意義）、また、何故倭武天皇は獲物を得られなかったという展開となるのか（狩猟の失敗を描くことの意味）、これらの問題は、この話の舞台である多珂郡飽田村の位置付けとも関係している（一二六頁）

という立場から、記紀の伝承も視野に入れて幅広く検討し、

藻島駅家の話も併せて飽田村の説話は、巻頭の国名起源説話から始まる倭武天皇巡幸説話の閉じめという意識をもって記されており、総記で常陸国を「常世之国」に擬え、山海の利の得られる地であることを記した内容と、この話は呼応している。総記では農耕生産が強調され、多珂郡では海の利が強調される。橘皇后は、「常世之国」と「橘」の繋がりを意識させ、利を得るのに相応しい存在として位置付けられている。そして、常陸国内を巡行してきた倭武天皇が最後に妻の力によって海の靈威を身につけることを描く（一三九頁）

という結論を導き出された。用意周到な用例の整理と分析を踏まえ、『常陸国風土記』全体を見渡すスケールの大きな考察であり、これは谷口氏の新説として高く評価される。

これに続く第七章『出雲国風土記』「古老伝云」の内と外も、周到な資料の読解に支えられた論が展開されており、評者は大いに刺激を受けた。

この論は、『出雲国風土記』に存する、「古老伝曰」で始まる記事と、「古老伝曰」を持たない記事について、大原郡を例として、そこにみられる「古老意識」について論じたものである。

谷口氏は大原郡の郷名起源譚における「古老」の有無について、神原・屋裏・佐世・阿用・海潮の各郡が古老系であり、屋代・来次・斐伊の各郡が非古老系であるという相違の背景に、地理的環境と情報源の違いがあるらしいことを、大原郡の河川記事に記された「出雲の大川」と「斐伊の大川」という、同一河川に對する異なった呼び方と、その地理的位置の分析を通して論じ、

大原郡の郷名起源譚における「古老」の有無を改めて確認すると、神原・屋裏・佐世・阿用・海潮郷が古老系、残る屋代・来次・斐伊郷が非古老系となっていた。この古老系と非古老系との関係が、河川名称の出雲大川系と斐伊川系とで対応しているのである。(中略) 河川の記事を併せて考えてみた場合に、それは情報源の相違という、記述の表面からは見えない事情が存在していた可能性を指摘し得るのである(一四九頁)

と述べている。これは、古風土記だからこそ可能な考察であると評することができる。古風土記にみられる多くの地理的記述については、国文学研究の素材とならないと受け止められてきた結果、あまり関心が払われてこなかった。しかしながら、そ

れを含めて全体として古風土記の記事を俯瞰すると、地名起源説話と地理的記述との間にある構造的な相関関係が見えてくる。ここに地誌としての独自の特徴があり、古風土記の真の資料的価値がある。この論は、長く古風土記の研究に携わってきた谷口氏だからこそ可能であった名人芸と言ってもいい見事な考察である。

谷口氏の、このような視点からの研究は、これまでの文学史研究における古風土記の評価を、根本的に見直す必要があることを示してくれている。地誌として独自の方法によって記述された古風土記を、記紀・万葉と横一線で評価することはもはやできないであろう。

次に、第三部「風土記神話の文学性」は、各国風土記に記された個々の神話や伝説を取り上げて、その独自の文学性について論じた論考をまとめたものである。谷口氏はここでも、一貫して古風土記には独自の視点があるという立場から解釈されている。たとえば、第十章「風土記の異類婚」の「おわりに」において、

風土記の異類婚は系譜的な保証を求めているように見え

る。それは「本来的に」「元々は」始祖神話であったものが変質した、というのではなく、今見るものがそもそも風土記的な始祖神話である可能性はないだろうか(二〇九頁)

と述べ、系譜的保証を求める『古事記』とは、一線を画すものであることを主張されている。古風土記の特徴の一つは系譜的記事がないことであり、谷口氏の見解は妥当である。同じく、第十一章『常陸国風土記』香島郡「事向」の文脈においても、

『古事記』独自の用語である「コトムケ」をそのまま『常陸国風土記』の「事向」に当て嵌めて解釈することは出来ない。『古事記』における「コト(言)」のサイクルは『常陸国風土記』には描かれず、また「コト」はあくまで「事」であって「言」ではない(二二三頁～二二四頁)

と述べるように、両者の類似性に基づく安易な同定に対して慎重な判断をされている。これは「事向」に限った問題ではなく、たとえば『常陸国風土記』の「天之原」についても、「高天原」との同定は避けるべきであるが、そのような判断をするためには各風土記の記述を詳細に分析する必要がある。谷口氏の論は、

そのような観点からみた考察として高く評価される。そしてこの基本姿勢は、第十二章以下においても揺るぎはない。その中で、第十四章『肥前国風土記』弟日姫子説話考は、この説話が歌謡を伴うことに着目し、そこにみられる文芸性への志向を考へることを通して、古風土記の文学史的意義を問うものとして注目される。

弟日姫子説話は『万葉集』巻五に残されている「松浦佐用比売」の伝承とも深い関わりがあり、当時からよく知られたものであったと考えられる。しかしながら、それらの間には相違もあり、谷口氏はとくに歌謡を伴う後日談的に記されている説話に注目して考察し、

過去の不思議な話と現在(この話の場合は墓)とをダイレクトに繋げることで始祖伝説たりうるとする風土記的な認識による話なのであって、神々の零落や蛇神信仰のくずれなどという範疇に含まれるものではないのではないか。ところで、そうした異類婚における男女の離別を解消するものとして、歌が有効に機能していると思われる(二六九頁)

と述べ、このような説話と歌謡の関係について、

大きな枠として、異類婚において共通する離別の型に対し、心情的な男女の恋情の伝達によって心の交流がはかられて終わるといのが、神話・伝説という枠組みを超えて獲得された文芸性として認められるのではないか(二七三頁)

と結論付けられている。ここには地誌としての古風土記が、ジャンルを越えて文学作品としての価値を孕む可能性が示されている。古風土記が文学作品としてどう評価できるのか、果たして文学作品といえるのかという問題は、秋本吉郎、植垣節など古風土記研究の先人が悩み続けた問題であり、これは今も重要な課題である。谷口氏の考察は、地誌と文学を橋渡しするものとして意味あるものと言えるだろう。

さて、本書を締めくくる終章において谷口氏は、

風土記は、各編者が中央の文書とは異なる地域独自の文書として仕上げ、提出したものと思われる。そのため、各風土記の記事・文章には様々な装いが凝らされているのである。そこに文学作品として享受し得る要因があったものと見受けられる(二七八頁)

という見解を述べておられる。ここにみられる「各風土記の記事・文章には様々な装いが凝らされている」という指摘は、古風土記の本質に関わるものであり重要であると言わねばならない。谷口氏と私は、お互いに大学院在学中から古風土記研究を志してきた仲間であり、本書を読むと古い記憶が甦ってくる。近年になって、私は古風土記の価値を他の上代文学の作品と同じレベルで捉える必要はないと考えるようになってきた。私たち二人がたどってきた道は、必ずしも同じではないだろう。しかしながらその違いを超えて、私は本書が現在の古風土記研究最高レベルの研究書であると、確信を持って言い切ることができ

る。以上、粗雑な論評を重ねてきた。論中、私の認識不足のために読み誤りや誤解もあるかもしれないが、それらの失礼に対してはこの場をお借りして、著者ならびに読者の皆様にお詫び申し上げて筆を擱きたい。

(A5判、三二二頁、笠間書院、二〇一八年三月発行、定価六五〇〇円+税)

注 山田直巳「地名起源譚の行方―神話の終焉と歴史時間の成立―(『古代文学の主題と構想』おうふう、二〇〇〇年十一月)